

# チャールズ・ワグマンと眼鏡

## —挿絵に見る明治期の日本人像の一考—

濱島広大

### はじめに

チャールズ・ワグマン(1832-1891)は1861年来日し、1891年に横浜で亡くなった画家である。彼は駐日英国外交官であったラザフォード・オールコック(1809-1897)やアーネスト・サトウ(1843-1929)、さらには写真家のフェリーチェ・ベアト(1825-1903)と交流があったことが知られる。特に、サトウとの関係は親密なものであった<sup>1</sup>。ワグマンの主たる日本での画家としての功績は、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の特派通信員としての活動(1861-1887)、風刺雑誌である『ジャパン・パンチ』の連載(1862,1865-1887)がある。角田によれば、ワグマンは「積極的に日本の風俗、文化取材していた」のであるが<sup>2</sup>、ワグマンは日本に住み続けながらも次第に『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の仕事を受けなくなり、『ジャパン・パンチ』の連載も終え、ヨーロッパへの日本の紹介をやめてしまう。だが、彼が開国直後から明治期の日本の様子を絵によって西洋に伝え続けたことで、西洋人の日本に対するイメージの形成に大きな影響を与えた。

本論文では、『ジャパン・パンチ』において多く描かれている眼鏡を掛けた日本人に注目する。ワグマンは水彩画や『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の挿絵などで眼鏡を掛けた日本人をほとんど描いていないのに対し、『ジャパン・パンチ』では比較的多く描いている。清水によれば「明治以降、日本人に目がねが急速に普及したのは、視力が弱いからではなく、ファッションとして広がったのだという。自分をモダンに見せるために、とくに男性がやたらと眼鏡をかけるようになり、そのことに「ワグマンがいち早く気がつい」たのである<sup>3</sup>。また、同書によればワグマンは「ドイツ指向の世相も批判してい」た<sup>4</sup>。日本の欧化に対するワグマンの否定的な態度は良く知られており、その表れとして考えることもでき、清水の主張は正しいように見える。だが一方で、眼鏡は開国以前からオランダとの貿易により国内に入っており、文献上で初めて眼鏡が言及されるのは1595年に出版された『羅葡日辞書』である<sup>5</sup>。このように眼鏡の流行を単純に開国後の西洋化

と関連付けることも難しい。そもそも、ワーグマンに眼鏡を明治期の日本の風俗を反映するものとして扱う意識があったのであれば、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』でも多く取り上げたと考えられる。それゆえに、眼鏡の男性が当時日本で急増していたことのみを『ジャパン・パンチ』でワーグマンが眼鏡を掛けた人物を多く描いた理由として挙げるのは性急であろう。

そこで、本論文ではまず眼鏡がどの程度当時の日本社会において流通していたか、あるいはどのような目的で着用されていたかを歴史的な視点で明らかにする。その上で、ワーグマンが『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』で取り上げた眼鏡の日本人の挿絵と『ジャパン・パンチ』の挿絵を比較し、どのような風刺の意味を込めて眼鏡の日本人を描いたのかを明らかにしていく。また、ワーグマンの風刺の内容は時期によって変化しているので、時期ごとに傾向を整理しながら考察していく。そのような分析を通して、明治期におけるワーグマンの、諦めと希望に満ちた日本人像の一端を論じる。

## 1. 眼鏡の歴史

### 幕末期までの日本における眼鏡の状況(1551-1868年頃)

まずは明治初期に至るまでの日本における眼鏡の普及状況を見る。日本に初めて眼鏡が流入したのは1551年である。イエズス会の宣教師であり、日本にキリスト教を広めたフランシスコ・ザビエル(1506-1552)が大内義隆に献上した眼鏡が、日本の眼鏡の歴史の最初とするのが定説となっている<sup>6</sup>。その後は日本でも眼鏡が生産され、江戸時代になると一定のニーズが高まり、江戸・京都・大坂には眼鏡屋が兼業の形ではあるが存在している<sup>7</sup>。大坪は、江戸時代を「揺籃期」とみなし、江戸時代における眼鏡需要は低く、また明治期に入ってもすぐには需要の高まりを見せないと考えている<sup>8</sup>。それに対し、小泉や白山は、江戸時代から既に眼鏡が一般化していたという立場を取っている<sup>9</sup>。

執筆者は後者の立場に立ち、考察を進める。その大きな理由としては江戸時代の俳諧や文学作品で眼鏡が利用されているだけでなく、白山が指摘しているように職人絵において眼鏡を掛けた職人が多く描かれており、日常にありふれたものであったと推測されるからである<sup>10</sup>。例えば、元禄四年(1691年)の伊藤信徳の俳諧に「すさまじや女のめがねとしのくれ」という作品がある<sup>11</sup>。この句の内容は「年の暮れに、女が眼鏡をかけている。なんとも情緒がなく興ざめなことだ」というものであるが、この歌の解説として「眼鏡が珍しかった時代のことだから」とあり<sup>12</sup>、白山が眼鏡が流通し始めた時期として挙げる元禄期と一致していることから<sup>13</sup>、当時

は眼鏡が流通し始めたがまだ見慣れないものという印象が強かった。だが、時代が下り、江戸時代の後期になると一般化が進む。例えば、滝沢馬琴の『近世説美少年録』(1829~1832 刊)では 2 か所眼鏡が登場する場面がある。1 つ目は「出だして見する五顆の玉を、大夫次やをら手に受けて、懐紙皮の間より、取出す眼鏡の紐を、左右の耳に糾被けて、引きよする燭台の、火光に翳して彼此と、見つゝ思はず膝うち鳴して(後略)」という場面である<sup>14</sup>。これは、大夫次が孫娘の無くした玉を探していたときに、その玉と類似する玉を持参したお夏が大夫次に渡し、大夫次が受け取ってよく吟味する場面である。ここでは、大夫次は本当に自分が探している玉であるかをよく確認するために、眼鏡を掛けるとともに燭台を近づけている。2 つ目は『利金は何ばかりか知らず侍れど、こは本金のみに侍り』といふに村長含笑で、件の金を受戴きつゝ、懐より眼鏡を拿出て、掛て円金の包を開きて、両三番数へ見つ、眼鏡外して懐なる(後略)」という場面である<sup>15</sup>。村長から借金をしていた落葉が元金のみを返済すると言って、金を渡す場面である。村長が金を受け取って確認するために、眼鏡を取り出して着用し、その後確認を終えると、外している。2 つの場面から、眼鏡は手元のことを詳細に確認するための道具であったことがわかる。このことは、白山が職人絵を通して「細かな手作業を伴う業種に従事する職人の多くは、その作業時において、眼鏡を掛けていた」と述べるのと一致する<sup>16</sup>。つまり、江戸時代において眼鏡は普及していたが、常用ではなく子細に物を見なければならぬ状況において使うものであったと考えるべきである。

このように眼鏡自体は既に江戸時代には一般化が進んでいる。しかし、滝沢馬琴(1767-1848)が『馬琴日記』の中で 1 両 1 分で眼鏡を購入したと述べているように、下女の年間の給金の最高額が 3 両であることを考えると高価な品であった<sup>17</sup>。眼鏡は日常的に目にする機会も増えてきたものの、誰しもが直ぐに手元に置くことができた品ではなかったのである。次項では、そのような眼鏡が明治時代に入り、どのような地位を獲得していったかを分析していく。

### 明治初期の日本における眼鏡の状況(1868-1888 年頃)

明治初期においても眼鏡は日常的に目にする機会が増えていたものの誰しもが容易に手にできるほど安価なものではなかったが、一方で白山によれば、文明開化により、明治 20 年代までは文明開化のシンボルとして、さらには官員に対する憧れを示すようなステータスシンボルとして機能するようになる<sup>18</sup>。例えば、グリフィス(1843-1928)は『皇国』(原題:*The Mikado's Empire*)において「無学な田舎者が都に行った時、眼鏡をかけて(本を)読んでいる学者を見た。そこで男はさっそく眼鏡屋へ行って眼鏡を買った。しかし男はそれをかけても一語もわからないので困るや

ら驚くやらしたという」といったエピソードを紹介している<sup>19</sup>。グリフィスはこの場面を直接目撃したわけではないが、このエピソードを日本人の間で語られる冗談話の1つであると前置きし、紹介したのだった。このエピソードは「学者は眼鏡を掛けている」というイメージ、ないしは眼鏡は賢さの象徴であるというイメージが1870年代には定着していたことを示すものである。そのようなイメージこそ、眼鏡が文明開化のシンボルになり得た要因の1つである。また、眼鏡の別のイメージ、すなわち眼鏡とハイカラ者の結びつきが「花月新誌」に表れている。

右手、<sup>ライドル</sup>里度爾を携へ、左手、地理初歩を挟み、仏帽を戴き、足に英帽を穿ち、鼻に高慢(眼鏡)を掛け、而して其實は門下に一個の半熟洋學生を蓄ふる也。此のごときは人に向ては則ち曰く彌留と、曰く魏造と、以て一官を釣り一資を博せんと欲す。<sup>20</sup>

このようにハイカラ者は眼鏡を掛けているのである。

一方で、江戸時代の職人たちのような使用の例も見られなくなったわけではない。グリフィスは「(前略)染物屋の並ぶ通りを過ぎて行く。小さいがさっぱりした店に、角ぶち眼鏡をかけた老人が座り、横に腐蝕液を置いて、次につける反物を用意している」という場面も紹介している<sup>21</sup>。染物屋が染物を漬ける作業をするために眼鏡をかけている。このような細かい作業をするために眼鏡をかける様子は他所でも見られ、「私は床に地図と本をひろげ、(宿屋の)女主人は眼鏡をかけて縫いものを始める」とある<sup>22</sup>。このように、手元のものを吟味して作業するような、江戸時代から続く眼鏡の使用の状況も見られる。もう1つ例を挙げよう。日本に滞在していたブラック(1827-1880)が著した『ヤング・ジャパン』の1872年の記述において、「(前略)経営者が坐っていた。その尊大な鼻の上には大きな丸い眼鏡がかかっており、数冊の厚い帳簿を自分の前や横においていた」とある<sup>23</sup>。ここでも作業中の経営者の様子を描いており、やはり細かい作業をする際にかけるものとして眼鏡が使用していた。これらの記述から、明治期に入ると、多様な眼鏡のイメージや使用状況が生じるとともに、常用する人も散見するようになったことが伺われる。明治20年頃(1888年頃)になるとアクセサリーとして青眼鏡が流行したと、大坪や白山は指摘している<sup>24</sup>。また、白山は蜻蛉眼鏡も流行していると言及する<sup>25</sup>。本論文で重要なのは前者である。なぜなら、ワーグマンの描く眼鏡の多くが色眼鏡であり、前者の流行の影響が考えられるからである。青眼鏡について言及する前に、明治から大正までの眼鏡の使用実態の概観を簡単に捉えるために柳田国男が眼鏡について言及した部分を引用する。

(医療の進歩により視覚障害者は減少しているが、一方で眼の力の弱い人の認知件数が増加している。しかし、そもそも眼の力が弱い人は日本中に多くいたのである。)それから青年の近視になり易いこと、是は薄暗い燈明と細かな仕事と、二つの似つかはしからぬものが落合つた、過渡期だけの現象だつたかも知れず、或は以前からも此通りだつたかも知れぬが、兎に角最初は書物を見るといふ一つの看板、もしくは青年の伊達の如くにも考へられたものが末にはなくては済まぬものになつて、忽ち日本を珍しい眼鏡国にしてしまつた。<sup>26</sup>

柳田は医療の進歩によって、新たな分節が生じ、視力の悪い人が増加し、現在(昭和期)は眼鏡の着用が一般化していると、医学に対する批判を述べている。ここで重要なのは明治～大正期において眼鏡の使用は書物を読むときか、青年の伊達眼鏡として着用するときの2つに限られていたという点である。つまり、細かい作業を行なうための眼鏡という江戸時代から続く使用状況と、ファッションの1つとしての眼鏡の着用という明治期になって見られるようになった使用状況が併存していたのが分かる。

では、ファッションのための眼鏡として機能した青眼鏡はどのようなものだったかを見る。明治15年に出版された『眼科学』によれば、眼鏡にはいくつか種類があり、青色の眼鏡は防護眼鏡の1種であることが述べられている<sup>27</sup>。またその特徴について、青色もしくは暗色のガラスを用い、強烈な光線を屈折して弱めるものだと記述されている<sup>28</sup>。つまり現在のサングラスに当たる物であった。しかし、明治21年(1888年)に出版された『視器の保養 簡明述義』では防護眼鏡の使用目的が拡大し、眼に塵や埃が入らないようにするという目的も増え、無色の物でも塵除けとして防護眼鏡に分類されているものもある<sup>29</sup>。だが、同書において注目すべきは「世には虚飾の爲めに眼鏡を掛け」とあるように、ファッションの1つとして着用する人が出て来ていたことが示されている点である<sup>30</sup>。近視用の眼鏡の使用についても防護眼鏡の使用についても同書は否定的である。先に見た蜻蛉眼鏡も含めて批判している。同書では煤色以外の主流な有色眼鏡(青色と緑色の有色眼鏡)の効用の低さが述べられているが、医学的見地から一般に使われる有色眼鏡の色も批判されている<sup>31</sup>。その代わりに、防護眼鏡は安いものではなく質の高いものを購入することを推奨している<sup>32</sup>。だが、「精良の物と雖も、必要なきに之を用ひ、虚飾のために之を用ひ、不行儀無作法なる掛様をなして、後日の患害を貽すべからず」と、医学的に意味がある眼鏡の使用のみを推奨している<sup>33</sup>。

このような批判は、同書も触れていた明治 20 年代前後におけるファッションの一部として眼鏡を掛ける流行を踏まえたものであろう。そのような流行は「学者は眼鏡を掛ける」というイメージや、「洒落者は眼鏡を掛ける」というイメージを備えた文明開化後の日本人の象徴に眼鏡がなったことに起因する。だが、その一方で本来の使用法も依然として残っており、医学の見地から正しい使い方を推奨する向きもあった。なお、リチャード・コーソンによれば、西洋においても 1860 年代には既に同様の傾向があった<sup>34</sup>。しかし一方で、同書によれば防護眼鏡を旅行者に推奨する向きもあった<sup>35</sup>。つまり、西洋では眼鏡を掛けることを推奨する立場の人物もいれば、推奨しない立場の人物もいた。そのため、日本に滞在した西洋人においても掛けることを積極的に行なう人物とそうでない人物がいた。例えば積極的に掛けた人物には、1877~1879 年の間、日本に滞在したエドワード・モース(1838-1925)がいる。彼は「青色の眼鏡をかけていたにも拘らず、白い砂に反射する太陽はギラギラと目に輝く」とあるように、青色の眼鏡を太陽光が強い日に使用していた<sup>36</sup>。またモース同様にお雇い外国人として日本に来たチェンバレン(1850-1935)は世界漫遊家という西洋の旅行者について「日よけのヘルメット帽、青い色眼鏡、軽い手荷物、セルロイドの襟カラー」という格好の特徴を伝えているように、西洋人の旅行者の必需品として色眼鏡があった<sup>37</sup>。しかし、チェンバレンは世界漫遊家の振舞いに否定的であり、彼自身は防護眼鏡を掛けていなかったようである。

このように、明治期にはファッションとして眼鏡を掛ける者も現れた。そのような日本人は、学者への憧れとして、西洋からやって来た旅行者への憧れとして、眼鏡を使用するようになった。そのような憧れゆえに眼鏡を掛けることは医学的にはむしろ悪影響が出るような使用をしていた。このように眼鏡の使用目的が拡大して行く明治期に日本に来日したワーグマンは、眼鏡を掛ける日本人を通して日本をどのように見ていたかを次節で明らかにする。

## 2. ワーグマンの描いた眼鏡を掛けた日本人

### 『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』の眼鏡を掛けた日本人

既に触れたように、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』において眼鏡を掛けた日本人をワーグマンが描いた回数は 5 回である。5 枚しかない挿絵であるが、年代順にワーグマンの日本人観を考察する。

最初に掲載された挿絵は 1861 年 8 月 10 日号の《横浜の(毎日やってくる)講釈師》(図 1)であり、この挿絵の場合眼鏡を掛けている人が偶々絵の主題の側にいたと思われる。その題の通り、横浜で見た講釈師の様子を描いたものだが、右端の男性が眼

鏡を掛けている。講釈師と聴衆の様子についての記述がある。聴衆の身なりについては「男たちは大部分自分のタオルを頭に巻きつけ、独楽形ズボン程度のことはよくあり、半ズボンすらつけないもの[ふんどし姿でいるもの]が珍しくなかった。娘たちは木ぐつをはき、それを履いて走ってもいっこう苦にならないらしい」と説明されている<sup>38</sup>。このように、眼鏡については一切触れておらず、眼鏡の人物が偶々その現場にいたために、描写したに過ぎないという態度である。1861年はワグマンが日本を訪れたばかりの時期であるので、西洋でも眼にすることができる眼鏡にそこまで関心を向け、意味を込める必要がなかった。

1861年8月10日号にはもう1枚挿絵が掲載されており、それが《大村で私たちが護衛してくれた火縄銃兵たち》である。これも眼鏡を掛けている人が偶々絵の主題の側にいたと思われ、眼鏡の男性が1人描かれているが、特に言及はない。

次は1864年10月15日号に掲載された《日本の木版画彫師》(図2)であり、眼鏡を掛けている人が絵の主題となっている。この挿絵では木版画彫師が彫版する様子が描かれており、丁寧に彫師の様子が記述されている。

日本の彫版家が坐り心地の悪い姿勢で仕事をしているのを見るのは痛々しい—つまり机とは名ばかりのものに体を折り曲げ、何ともごちない格好で彫刻刀を持っているのである。けれども、1本の紐で耳のまわりにゆわえつけた彼のすばらしい眼鏡を見るのはおもしろい。彼の使っている道具は、至って簡単な出来である。使っている木材は、イギリスのつげのように堅くはなく、むしろ極めて柔らかなものである。(後略)<sup>39</sup>

このように、ワグマンは眼鏡に言及し称賛している。リチャード・コーソンによれば、ワグマンが称賛した眼鏡はスパニッシュイタリアンと呼ばれるスタイルの眼鏡であり、1580年代にイエズス会の宣教師が中国に伝えたものだが、同種の眼鏡が日本でも維持され続けていることがこの挿絵からわかる<sup>40</sup>。そのような古いスタイルの眼鏡に称賛を与えているのである。江戸時代にはレンズの色やその材質を取り上げる随筆や類書はあったが、フレームについては産業に関する論文集でその材質について論じたものがあるのみである<sup>41</sup>。江戸時代は既に論じたように、職人を中心に手元に注意を払わなければならないような作業をする間だけ眼鏡を掛け、作業が終われば外すという一時的な使用が中心であり、服飾の1つとしてデザインにこだわるほど眼鏡は機能していなかった。だからこそ、当時は視覚の矯正に関わらないようなフレームのデザインに注目する必要性がなかった。話を戻すが、作業の

ために利用される眼鏡として描かれているのが木版画彫師の挿絵の眼鏡である。そのような眼鏡に対してワーグマンが賛美を与えているのは眼鏡が実用的に使われているからであろう。前節に見たように、西洋において眼鏡の使用を推奨する立場の者としなない立場の者がいたが、ワーグマンは後者に近い立場と言える。つまり、ワーグマンは眼鏡を実用的なものとして見なし、ファッションのために常に着用し続けるような使い方は眼鏡の本分ではないと考えていたと推測される。

1866年1月27日号に掲載された《日本人画家たちの社交的会合》では眼鏡を掛けた人物が何人かいるが焦点は当たっていないが、画家たちは作品制作を行っており、実用的に眼鏡を使用している。この挿絵についてはファッションとして眼鏡が利用されていないからこそ、ワーグマンは批判していないのかもしれない。

そのためか、1877年10月13日に掲載された《日本の内乱：薩摩の戦場に出かける江戸の警官たち》(図3)では、中央と左端の男性が眼鏡を掛けているが、この2名について「もっとも彼らのうち、1人、2人は近視で、めがねをかけているから、ライフル銃を持って、ほんのどうでもいいような狙撃兵であることがわかるだろう」とワーグマンは否定的に評価している<sup>42</sup>。これは兵士たちが、先に見た版画彫師のように、何らかの作業をしていないにもかかわらず、眼鏡を掛けているからであろう。少なくとも、ここでは従軍する軍人が眼鏡を掛けることは正しい振舞いではないという認識で語られている。

このように『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』においてワーグマンが描いた眼鏡を掛けた日本人は使用する必要性があるという共通点がある。その上で、ワーグマンは特に手元を良く見えるようにするという眼鏡の本義と言うべき使用を称賛しているが、一方で従軍時に眼鏡を掛けるようなふさわしくない状況で眼鏡を使用することには否定的である。このことからワーグマンは眼鏡の使用目的が実用的でなければならないという意識を持っていたことがわかる。

### 『ジャパン・パンチ』の眼鏡の日本人

『ジャパン・パンチ』の挿絵では眼鏡を掛けた日本人を多数描いた。風刺している人物が眼鏡を掛けている場合もあるが、ここでは眼鏡が持つ象徴性を考察する。『ジャパン・パンチ』の挿絵については表に概略を示した。この表では眼鏡を掛けた日本人の挿絵だと確実に判断できるもの全てを取り上げている<sup>43</sup>。ワーグマンの眼鏡の描き方は時期によって少しずつ変化していることが分かるので、時期を示しながらワーグマンと眼鏡の関係、そしてワーグマンの日本人観について分析する。

1862-1870年頃は「学者のイメージ」を反映した挿絵が多い。そのような挿絵では学生や書生の挿絵が主になっているため、学者への憧れを持つ者のイメージとし



て眼鏡を描いている。例えば《パーチ先生の日本の学校、その1》(図4)や《洋行帰りの書生、将来の日本を背負う》(図5)はこの時期の典型的な挿絵である。このようなイメージは既に見たように、明治期に眼鏡に付与された新しいイメージである。この時期、ワグマンは風刺としてよりも日本の様子を伝える挿絵として描いていたが、《パーチ先生の日本の学校、その1》では異様なまでに生徒全員が眼鏡を掛けている。《洋行帰りの書生、将来の日本を背負う》でも眼鏡を掛けている人が多く、説明では書生が過度と言えるほど勉強してきたことが書かれており、風刺する態度も見える。つまり後の時期への布石となる挿絵が多く見える時期でもある。

1871-1873年頃は「洒落者のイメージ」を反映した挿絵が増えてくる。もちろん、前時期の内容もあるが、この時期に至ると「モダン」という語も見られるようになり、また学生や書生ではない人物の挿絵が多くなっている。例えば、初めて「モダン」が説明に付されている《乗馬を楽しむモダンな日本人》(図6)では人物は洋服を着ているが、学生や書生ではないように見える。さらに、人物は出っ歯に描かれており、明白に風刺する態度が強まっている。このような外見について、清水は「栄養状態が悪かったからだ」と述べている<sup>44</sup>。しかし、ワグマンは『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』では『ジャパン・パンチ』ほど日本人を出っ歯で描いていなかった。『ジャパン・パンチ』では眼鏡と同様に出っ歯も風刺に利用されていた。《古き日本の物語、若き日本の物語》(図7)では、眼鏡と出っ歯と汚い風貌で、日本人の外見を一層悪く描いているが、これも風刺する態度が強まった証拠と言える。既に見たように、ワグマンは眼鏡の本義に合わない使い方に対して否定的だが、眼鏡の着用は一部の人の傾向とし、日本人全体のものではないと捉えている。

1874-1876年頃は先の時期と同様に、「洒落者のイメージ」として使われる眼鏡を批判する姿勢は変わらないが、この時期になり日本を象徴する人物として眼鏡、特に有色眼鏡を掛ける人物が描かれるようになる。例えば《台湾的一幕、その3》(図8)では有色眼鏡を掛けた、出っ歯の日本人が描かれている。また、《操り人形師》(図9)でも日本人は眼鏡を掛けているのに対し、中国人は眼鏡を掛けていない。《樺太千島交換条約の様子》(図10)ではロシア人も日本人も眼鏡を掛けているが、日本側は出っ歯で有色眼鏡を掛けた人物が描かれている。日本人は燕尾服を着ているのに対し、ロシア人はセミフォーマルな格好をしていることを踏まえると、燕尾服の着用機会を理解していない日本人のちぐはぐさが際立つ。事実、《報道の弾圧》(図11)や《日本を紹介する紳士たち》でも日本人は外交の場面でもないにもかかわらず、燕尾服を着ている。そもそも、ワグマンは眼鏡についても使われるべきときに使われている眼鏡に肯定的な評価を与えていた。洋服についても同様の態度を示したのであろう。眼鏡や洋服や出っ歯を用いて一層風刺する態度が強まった挿絵が急

増したのは、眼鏡や洋服の着用といった欧化が一部の日本人の現象ではなくなったとワーグマンは感じたからだろう。だからこそ、この時期になり日本を象徴する人物が眼鏡、出っ歯、燕尾服という3つで表現されるようになるのだろう。実際、《奇妙な光景、毎日午後海岸通りで見かける眼鏡を掛けた馬と馬丁たち》(図12)では日常に見られる珍奇な光景を描いている。この挿絵を、ロガラは日本がドイツ化しているのを反映した挿絵であると述べるが<sup>45</sup>、この時期の表現の動向を見たときにドイツ化に限定しているとは思えない。また、清水は日本人が舶来の眼鏡を掛けるようになったと述べるが<sup>46</sup>、眼鏡自体は十分に国内生産もなされており、「舶来」と断言することは出来ない。しかし、重要なことは西洋からの影響や近代化の影響というものが一部の現象ではなく国全体の現象となり、それに対しワーグマンは危惧を示すようになってきているということである。

1877-1881年頃は今までと基本的な姿勢は変わらないが、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』で描いた主題を援用して『ジャパン・パンチ』の挿絵を描いており、より一層風刺の対象としながらも現実的な問題として近代化や欧化が存在することを強調しているように見える。例えば、西南戦争を主題とした、《西南戦争、官軍のラッパ手》(図13)や《自白》や《官軍焼き芋を食べる》(図14)や《ネズミを狩る官軍》は、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』で掲載された《日本の内乱：薩摩の戦場に出かける江戸の警官たち》と同様の主題を描いている。このように現実と風刺が重なり合っており、掲載時期もほぼ同じとなっている。それにもかかわらず、『ジャパン・パンチ』では眼鏡で出っ歯の官軍を中心に据えており、欧化・近代化への批判姿勢が明確に示されている。また《ふさわしい衣装の人を描く》(図15)は、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』の《日本の木版画彫師》を基にしたような挿絵となっているが、描かれているものはちぐはぐなものばかりである。題に「ふさわしい衣装」とあるが、武士の格好をしている西洋人がモデルを務めており、それを描く「現地のアーティスト」は足袋を履いているものの洋服を着て、眼鏡を掛け、出っ歯である。ワーグマンが欧化・近代化への批判姿勢を強めていなければ、既に描いていた《日本の木版画彫師》を利用して、ちぐはぐな二者を描くことはなかっただろう。

1882-1886年頃は、欧化や近代化への批判は続くものの、近代化・文明化批判と、欧化・ドイツ化批判の2つの方向へと変化している。そのため、眼鏡を掛けた人物を描く際にも欧化・ドイツ化批判では明白に「ドイツ」という言葉を示しており、近代化・文明化批判では「文明化」という言葉を示している。もちろん、両方の特徴を持つような挿絵もあるが、より具体化した批判がなされているという点がこの時期の最大の特徴と言える。ドイツ化批判の典型としては、《陽気でお祭り気分の若

者たち》(図 16)と《日本へのドイツの影響》(図 17)がある。前者の説明書きに「ドイツ人のように決してならない」とあり、後者の説明書き「今や彼らはゲルマン的なサウザークラウト色の眼で全てのものを見ている」とあり、ドイツから影響を受けていることを批判している。日本が憲法や陸軍や医学など多くの分野の近代化を、ドイツを参考に進めていたことを明白に反映したものである。この点については清水も言及している<sup>47</sup>。近代化・文明化批判の典型としては《文明開化論者はモンスターの様に見える》(図 18)と《ジャガナート》(図 19)がある。前者は説明書き自体に文明化批判の態度が見えるが、後者は一見分かりづらい。汽車を用いて近代化を表すという態度はワグマンの挿絵において早い時期からあり、1867年12月に掲載された《孟子に諭される日本人》(図 20)がある。この挿絵は『孟子』尽心章の一部を利用しており、1867年という比較的早い時期において既に近代化しない方が良いということを示している<sup>48</sup>。そのような汽車をジャガナートというヒンドゥー教の伝承と重ね合わせ、近代化のために自己犠牲をする日本人を描いている<sup>49</sup>。このように、ワグマンは明治期になり近代化した者の証として流行していく眼鏡と、欧化・近代化していく日本人を重ね合わせた。そこから江戸時代まで有していた日本人の美德が喪失していることに悲嘆している。

### 3. 結論

ワグマンは、眼鏡は使用すべきときのみ掛けて使うものであるという眼鏡に対する考え方があった。そこには実用性を重視する姿勢があると言える。実際、実用性の高い眼鏡については『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の挿絵から考えて肯定的に捉えている。そして、日本人は版画彫師のように実用的な眼鏡の使い方をしており、ワグマンが日本人を好意的に評価する一因を与えることになる。しかし、ワグマンはそのような具体的な部分の1つ1つによって日本に好感を持ったのではなく、むしろ日本人や生活や風俗や自然といった要素が組み合わせられたことでできる空間として日本を好んでいた。事実、オールコックによればワグマンは日本人と自然と一緒に描いており、日本という空間を生み出してきた日本人や日本人の生活や風俗を好んでいた<sup>50</sup>。しかし、欧化や近代化により、彼が愛した日本が失われつつあるのに対して、眼鏡を掛けた日本人を描いて急速に変化する日本を風刺したのである。ワグマンにとって欧化や近代化は文明化の近道ではなく、むしろ文明を捨てる行為に近かった。オールコックとワグマンは比較的近い日本観を持っていたようであるが、オールコックは日本をヨーロッパとは異なる形態の文明国であることを認めている<sup>51</sup>。つまり、ワグマンも同様の日本観を持ってい

たならば、保持すべき実用的生活観を捨てて悪化していく日本、そしてそのような日本になることを望む愚かな日本人としてワーグマンには写ったはずだ。ワーグマンにとって明治期の日本人は保持すべき簡素で実用的な生活態度を忘れてしまい、欧米への憧れによって自己を着飾ることに満足し、失ったものの重大さに気付かない愚かな人々であった。しかし、ワーグマンは日本人を見捨てるのではなく、保持し継承すべき生活観を思い出させ、少しでも元の日本の姿に戻すために、眼鏡を掛けた日本人の風刺絵によって働きかけ続けた。欧化や近代化が進む中で、眼鏡を掛けた日本人の風刺絵による批判を強めていったが、日本人はそれでも欧化や近代化をやめることはなかった。そして、彼は日本に対して諦めてしまったかのように『ジャパン・パンチ』を廃刊するが、最終号の最終ページにおいて『トバエ』が日本人にとって有益な雑誌になるという期待を寄せている<sup>52</sup>。これは自身では出来なかったことをビゴーに託しているように見える。つまり、ビゴーであれば日本人に簡素で実用的な生活観を取り戻させることができると考えており、ワーグマンは諦めてはいない。だからこそ、一時的に展覧会のためにロンドンに帰国するものの、すぐに日本に戻っている。しかし彼は帰国後すぐに病に伏し、両義的な日本人に対する気持ちは解消されないまま日本で亡くなってしまふ。ワーグマンの日本人観には諦めと希望の両方の性質を帯びたものがあつた。

註

- 1 清水勲編『ワーグマン日本素描集』岩波書店、1987年、p.157。
- 2 『チャールズ・ワーグマンの来日 150周年記念 ワーグマンが見た海一洋の東西を結んだ画家一』神奈川県立歴史博物館、2011年、p.69。
- 3 清水『ワーグマン日本素描集』p.88。
- 4 同上、p.90。
- 5 「眼鏡」『日本国語大辞典』小学館、1976年による。
- 6 大坪元治『眼鏡の歴史』日本眼鏡卸組合連合会、1960年、大坪元治『史料 東京眼鏡レンズ史』池谷良平、1977年、白山晰也『眼鏡の社会史』ダイヤモンド社、1990年、小泉和子「眼鏡」『国史大辞典』吉川弘文館、1992年による。
- 7 『国史大辞典』及び、大坪『眼鏡の歴史』p.83。
- 8 大坪『東京眼鏡レンズ史』p.61。
- 9 『国史大辞典』や白山『眼鏡の社会史』p.114。
- 10 白山『眼鏡の社会史』pp.114・115。
- 11 雲英末雄、山下一海、丸山一彦、松尾靖秋校注・訳『新編 日本古典文学全集 近世俳句俳文集』小学館、2001年、p.84。

- <sup>12</sup> 同上。
- <sup>13</sup> 白山『眼鏡の社会史』 p.114
- <sup>14</sup> 徳田武『新編 日本古典文学全集 近世説美少年録』第1巻、小学館、1999年、p.238。
- <sup>15</sup> 徳田武『新編 日本古典文学全集 近世説美少年録』第2巻、小学館、2000年、p.479。
- <sup>16</sup> 白山『眼鏡の社会史』 p.133。
- <sup>17</sup> 『馬琴日記』の本文は饗庭篁村校「天保七年丙申至弘化三年丙午日記抄」洞富雄、暉峻康隆、木村三四吾、柴田光彦編『馬琴日記』第4巻、中央公論社、1973年、p.310による。また、当時の給金の額については小野武雄『江戸物価事典』展望社、1995年、p.216による。
- <sup>18</sup> 白山『眼鏡の社会史』 p.278。
- <sup>19</sup> W. E.グリフィス『明治日本体験記』山下英一訳、平凡社、p.196。( )内は執筆者。原文は William Elliot, Griffis. *The Mikado's Empire*. New York: Harper, 1895; rpt, Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1973, pp.495-496.
- <sup>20</sup> 無頼堂主人「愚言一則」『花月新誌』花月社、1878年、2月26日号;復刻版、第2巻、ゆまに書房、1984年、p.384。なお原文は漢文になっているが、引用では書き下し文に改めた。なお、書き下し文にする際に、森銑三『明治東京逸聞史』第1巻、平凡社、1969年、p.58を参考にした。
- <sup>21</sup> グリフィス『明治日本体験記』p.53。原文、Griffis, *The Mikado's Empire*. p.365。なお、原文では染物師の様子が描かれた挿絵も付されており、眼鏡の使用の状況が良く分かる。
- <sup>22</sup> グリフィス『明治日本体験記』p.255。原文は Griffis, *The Mikado's Empire*. p.544.
- <sup>23</sup> ジョン・レディ、ブラック『ヤング・ジャパン 横浜と江戸』ねず・まさし、小池晴子訳、第3巻、平凡社、1970年、p.195。原文、Jhon R., Black. *Yōng Japan. Yokohama and Yedo. A Narrative of the Settlement and the City from the Signing of the Treaties in 1858, to the Close of the Year 1879. With a Glance at the Progress of Japan during a Period of Twenty-one Years*. Vol. II, New York: Baker, Pratt & Company, 1883; rpt, London: Oxford University Press, 1968, p.370.
- <sup>24</sup> 大坪『史料 東京レンズ史』p.65、及び白山『眼鏡の社会史』pp.274-275。
- <sup>25</sup> 白山『眼鏡の社会史』pp.276-277。蜻蛉眼鏡は蜻蛉の眼のようにレンズが大きく正円形をなしている眼鏡のことである。

- 26 柳田国男『明治大正史 世相篇』益田勝実解説、平凡社、1971年、pp.285-286。  
( )内は筆者。
- 27 榊淑纂譯『眼科學』、卷之三、榊淑、1882年、pp.170-171。
- 28 同上、p.170。
- 29 武藤一明『視器の保養 簡明述義』丸善、1888年、p.34及びp.84。
- 30 同上、p.33。
- 31 同上、pp.82-83。
- 32 同上、p.84。
- 33 同上、p.84。
- 34 リチャード、コーソン『メガネの文化史—ファッション・デザイン』梅田晴夫訳、八坂書房、1999年、p.166によれば、1860年代の西洋においてファッションとしての眼鏡の使用に対して批判的な者がいたようである。
- 35 コーソン『メガネの文化史』p.165。
- 36 エドワード、モース『日本その日その日』石川欣一訳、第2巻、平凡社、1970年、pp.166-167。原文、Edward S. Morse. *Japan Day by Day 1877, 1878-79, 1882-83*. Vol. II. Boston & New York: Houghton Mifflin Company, 1917, p.19.
- 37 チェンバレン『日本事物誌』高梨健吉訳、第1巻、平凡社、1969年、pp.268-271。原書、Basil Hall, Chamberlain. *Things Japanese being Notes on Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Kobe: J. L. Thompson & Co., 1927, pp.212-215。チェンバレンがこの項目を書くために参考にしている、ネットーの『日本の紙の蝶』は1888年に出版されており、明治20年までの日本の様子を伝えている。
- 38 金井圓編訳『描かれた幕末明治 イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ 日本通信 1853-1902』雄松堂書店、1973年、p.68、[ ]内は執筆者。原文、*ILN*, 10 Aug, 1861, p.148.
- 39 金井『描かれた幕末明治』p.115。原文、*ILN*, 15 Oct, 1864, p.404.
- 40 コーソン『メガネの文化史』pp.37-38,148。
- 41 随想は田宮仲宣『橘庵漫筆』1801年、類書は寺島良安編『和漢三才図絵』1712年、産業に関する論文集は三宅也来『萬金産業袋』1732年である。全て本文はジャパン・ナレッジにおいて『古寺類苑』を参照した。
- 42 金井『描かれた明治日本』p.222。原文、*ILN*, 13 Oct, 1877, p.357.
- 43 表には挿絵の掲載年月、挿絵の題、挿絵における眼鏡の描写を示している。
- 44 清水『ワーグマン日本素描集』p.90。また、清水は出っ歯の風刺性についても叢書内で述べている(pp.85-91)。

45 ジョゼフ、ロガラ編集・解説『Mr.パンチの天才的偉業 チャールズ・ワグマンとジャパン・パンチが語る横浜外国人居留地の生活 1862-1887』山下仁美解説・訳、有隣堂、2004年、p.96。

46 清水『ワグマン日本素描集』p.88。

47 清水『ワグマン日本素描集』p.91。

48 《孟子に諭される日本人》はJP、Dec,1867(復刻版第2巻 p.72)のものである。尽心章 44の本文全体の書き下しは「孟子曰く、已む可<sup>レ</sup>からざるに於て已むる者は、已めざる所無し。厚くすべき所の者に於て薄くするものは、薄くせざる所無し。其の進むこと鋭き者は、其の退くこと速やかなり、と」(内野熊一郎『新釈漢文大系 孟子』第4巻、明治書院、1962年、p.480)となる。ここでは、日本人が文明化するのに邁進しているが、それは結果的に退化していくのも速めているという意味を表しているのであろう。

49 橋本泰元、宮本久義、山下博司『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版、2005年 p.237, p.253。

50 Rutherford, Alcock. *The Capital of The Tycoon: a Narrative of a Three Years Residence in Japan*, Vol.2. London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863, p.70, pp.83-84, p.133. ワグマンはオールコックに自然と日本人と一緒に描いている姿を目撃されており、日本人とその周囲の環境の調和として日本が好きだったことが分かる。

51 Alcock, *The Capital of The Tycoon: a Narrative of a Three Years Residence in Japan*, Vol.2. p.263.

52 復刻版、第10巻、p.324。

表 『ジャパン・パンチ』における眼鏡を掛けた日本人が描かれている挿絵一覧

| 掲載年月<br>(復刻版頁数)     | 挿絵の題              | 挿絵における眼鏡の描写   |
|---------------------|-------------------|---|
| 1862年7月<br>(p.50)   | 《分かち合うフランス人》      | 背景にいる、洋服を着た書生・学生の男性1人が無色眼鏡を掛ける。   |
| 1866年11月<br>(p.313) | 《パーチ先生の日本の学校、その1》 | 若い日本人の和服を着た男性たちが、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛け、パーチ先生に挨拶をしている。  |
| 1866年12月<br>(p.327) | 《パーチ先生の日本の学校、その2》 | 学生同士の会話の姿を描く。長靴を履き、和服を着た日本人が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛け、西洋人の学生と会話している。背景において、同様の格好の日本人が数名パーチ先生の指導を受けている。 |

|                     |                         |   |
|---------------------|-------------------------|---|
| 1867年1月<br>(p.5)    | 《切腹をする人々》               | 2人の男性が切腹をしており、1人は洋服を着用し、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛ける日本人で、もう1人は西洋人らしい人である。  |
| 1867年1月<br>(p.12)   | 《パーチ先生の日本の学校、その3》       | 長靴を履き、和服を着た日本人が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛け、講義内容に不服を申し立てている。  |
| 1867年7月<br>(p.42)   | 《教育！教育！教育！》             | 洋服を着た、若い日本人男性が無色眼鏡を掛けている。   |
| 1867年12月<br>(p.75)  | 《現代のウィリアムテル》            | 聴衆の中に和服を着た(眼球が見えない)無色眼鏡の日本人男性が描かれている。   |
| 1868年12月<br>(p.199) | 《洋行帰りの書生、将来の日本を背負う》     | 数名の若い洋服を着た日本人男性たちの内、3人が眼鏡を掛ける。2名は(眼球が見えない)無色眼鏡を、1名は無色レンズのモノクルを掛ける。  |
| 1869年8月<br>(p.293)  | 《江戸と横浜でのゲームの比較》         | パークスと日本人の代表者がゲームをしている姿を見る観客の1人に、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛ける。  |
| 1870年10月<br>(p.76)  | 《責任を果たさない編集者》           | 編集者に対して不服を申し立てる、洋服の日本人男性が、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。  |
| 1870年10月<br>(p.81)  | 《乗馬を楽しむモダンな日本人》         | 馬に乗る、洋服を着た日本人が、有色眼鏡を掛けている。  |
| 1872年11月<br>(p.241) | 《一般的なケッパ―》              | ケッパ―の実を観察する人々の中に数名の洋服を着た日本人がおり、その内の1人が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。  |
| 1873年8月<br>(p.6)    | 《古き日本の物語、若き日本の物語》       | 新旧の日本像が描かれており、若き日本側に存在する数名の日本人男性が有色眼鏡を掛けている。なお、この題はミットフォードの <i>Tales of Old Japan, 1871</i> を利用したものと思われる。     |
| 1873年9月<br>(p.17)   | 《列車の駅》                  | 背景において、洋服を着た日本人男性2名が有色眼鏡を掛けている。   |
| 1873年9月<br>(p.21)   | 《郵便機構の開設》               | レターボックスと書かれた箱の両脇に暇そうに寝転ぶ洋服の日本人がおり、1人が有色眼鏡を掛けている。  |
| 1874年1月<br>(p.48)   | 《公式の服装で新年の訪問をするモダンな日本人》 | 多くの日本人が洋服を着ている。2人が有色眼鏡を掛け、1人が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。   |
| 1874年4月<br>(p.94)   | 《間一髪危機脱出、あるいは以前と現在》     | (眼球が見えない)無色眼鏡を掛けた洋服の日本人男性が描かれている。以前と現在の違いは髭の有無で、以前は胸部まで伸びている。A close shave という慣用表現の shave を掛詞のように用いた挿絵と考えられる。 |



チャールズ・ワグマンと眼鏡

|                    |                                   |   |
|--------------------|-----------------------------------|---|
| 1874年5月<br>(p.108) | 《海岸通りをよじ登らされるロシア人》                | ワグマンが良く描く、横浜の海岸通りにおいて、軍服を着た日本人が有色眼鏡を掛けている。  |
| 1874年5月<br>(p.110) | 《1874年5月の場面》                      | 「条約制限の通知」と書かれた掲示の前で喜ぶ日本人と西洋人が描かれており、日本人は(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。  |
| 1874年6月<br>(p.117) | 《台湾的一幕、その3》                       | 大きな台湾人と、洋服を着た小さな日本人が描かれている。その日本人が有色眼鏡を掛けている。  |
| 1874年9月<br>(p.155) | 《10月2日の台湾的一幕、その1》                 | 台湾人と日本人が向かい合っており、両者とも風変わりな衣装を着ており、眼鏡も掛けている。台湾人の眼鏡の方が、レンズの大きさが大きい。   |
| 1875年1月<br>(p.3)   | 《操り人形師》                           | 円(yen)と書かれた人形と、両(tarl)と書かれた人形がオリエンタル・バンク(Oriental Bank Corporation)と書かれたものを持つ西洋人に操られている。日本人は(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。              |
| 1875年3月<br>(p.17)  | 《Jokei Journal》                   | 1874年9月にも見られた Jokei? Journal に関する記事。1874年の記事にも眼鏡の男性がおり、日本人か西洋人か判断がつかないが、有色眼鏡を掛けている。この記事内では、洋服を着る日本人らしい男性が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。 |
| 1875年8月<br>(p.86)  | 《警官たち》                            | 西洋人が警官たちに連行される挿絵であり、警官3人は全員有色眼鏡を掛けている。  |
| 1875年8月<br>(p.88)  | 《樺太千島交換条約の様子》                     | (眼球が見えない)無色眼鏡を掛けたロシア人と、有色眼鏡を掛けた日本人が樺太と千島列島を交換している。  |
| 1875年8月<br>(p.91)  | 《奇妙な光景、毎日午後海岸通りで見かける眼鏡を掛けた馬と馬丁たち》 | 2頭の馬と2人の馬丁が描かれており、馬も馬丁も(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。馬が眼鏡を掛けたとえ話は18世紀に既にあったようである(コーソン『メガネの文化史』p.85)。                                    |
| 1875年9月<br>(p.97)  | 《報道の弾圧》                           | 同年の6月に施行された新聞紙条例の影響を描いたものと思われ、実在した雑誌名が挿絵内に記載されている。その中で蠟燭を持つ洋服の日本人男性が有色眼鏡を掛けている。   |

|                     |                      |   |
|---------------------|----------------------|---|
| 1875年9月<br>(p.106)  | 《日本を宣伝する紳士たち》        | 4人の日本人男性が描かれており、3人が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。   |
| 1875年10月<br>(p.109) | 《高位を紹介するディオゲネス》      | ディオゲネスらしき人の後ろに、小柄な日本人がおり、有色眼鏡を掛けている。  |
| 1876年1月<br>(p.150)  | 《だまし取られる!》           | 万国新聞と書かれた服を着る西洋人が描かれており、背後に(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けた男性が薄く描かれている。                                      |
| 1876年6月<br>(p.207)  | 《日本にやって来た朝鮮使節》       | 5月29日にやって来た朝鮮使節の様子を描いたものと思われる。朝鮮使節の代表と対応する日本人の2人のうち1人が有色眼鏡を掛け、背景にも1人(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている男性がいる。 |
| 1876年6月<br>(p.213)  | 《1876年6月28日の浅草寺》     | 「出版に関する法(新聞紙条例)を抗議した1周年記念を祝う日本人編集者たち」と書かれているが、悲嘆している様子が描かれている。その中の1人が有色眼鏡を掛けている。              |
| 1876年12月<br>(p.277) | 《祝辞を受け取る『ジャパンヘラルド誌』》 | 『ジャパン・パンチ』で見られる、他紙風刺の1つ。祝辞を述べる日本人は有色眼鏡を掛けている。   |
| 1877年2月<br>(p.19)   | 《西南戦争、官軍のラッパ手》       | この挿絵の主題である、軍服のラッパ手が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。   |
| 1877年3月<br>(p.36)   | 《自白》                 | 「想定される共犯者」と説明が付された人物たちの1人が有色眼鏡を掛けている。全体的な記事の内容は西南戦争に関するものと思われる。                               |
| 1877年3月<br>(p.38)   | 《官軍焼き芋を食べる》          | 焼き芋を食べる官軍たちの中に2人、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けた人物がいる。  |
| 1877年4月<br>(p.47)   | 《ネズミを狩る官軍》           | 多くの官軍の中で有色眼鏡を掛けている男性が1人、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている男性が1人いる。   |
| 1877年9月<br>(p.106)  | 《横須賀の言語学者とパンタグロス博士》  | パンタグロスはヴォルテールの『カンディッド』に出てくる楽観主義者の教師のことである。言語学者は無色眼鏡を掛けており、聴衆の中にも1人無色眼鏡を掛けている人がある。             |
| 1878年3月<br>(p.182)  | 《金の密輸業者》             | 和服を日本人が助けを求める様子が描かれており、その内の1人が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。  |

チャールズ・ワグマンと眼鏡

|                     |  |   |
|---------------------|--|---|
| 1878年5月<br>(p.205)  | 《髭を剃った彼は<br>今や、とても美しく<br>なったものでしょ<br>うか》 | 洋服を着た日本人男性らしき人が本のようなものを開<br>きながら立っている。その男性は無色眼鏡を掛けている。  |
| 1878年5月<br>(p.211)  | 《ふさわしい衣装<br>の人を描く》                       | 日本人の絵師が武士の格好をする西洋人を描いてい<br>る。その絵師は(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。  |
| 1878年10月<br>(p.267) | 《呑み込むべき小<br>さな錠剤》                        | 英国公使であるパークスが無理やり日本人に錠剤を飲<br>ませている。その日本人は無色眼鏡を掛けている。   |
| 1878年11月<br>(p.287) | 《大日本の息子た<br>ち》                           | 文明化された富士と題された、シルクハットを乗せら<br>れた富士山と一緒に描かれた、4人の日本人のうち3<br>人が有色眼鏡を掛け、1人が(眼球が見えない)無色眼鏡<br>を掛けている。                                   |
| 1879年2月<br>(p.25)   | 《高等裁判所での<br>報道を許されない<br>報道記者》            | 報道記者らしい人物が、検事か弁護士か判事かわから<br>ないが何者かに訴えている様子を描いている。その汽<br>車は無色眼鏡を掛けている。   |
| 1879年3月<br>(p.34)   | 《褒められる報道<br>記者》                          | 2月の人物と同じ人物が描かれているが、眼鏡は(眼球<br>が見えない)無色眼鏡である。   |
| 1879年5月<br>(p.61)   | 《地方の人々、横浜<br>と東京の比較》                     | 横浜人と東京人を比較したと思われる記事。東京人側<br>に有色眼鏡の男性が描かれている。  |
| 1879年9月<br>(p.115)  | 《なんてことだ、彼<br>らは爆発するよう<br>だ》              | 人々がコミカルに爆発する様子が描かれている。有色<br>眼鏡の男性が2名いるが、日本人かは正確には判断で<br>きない。  |
| 1880年3月<br>(p.184)  | 《ポルトガル領事》                                | ポルトガル領事のすぐ後ろに、(眼球が見えない)無色眼<br>鏡を掛けた日本人男性が描かれている。  |
| 1881年5月<br>(p.56)   | 《日本のどこでも<br>見られる奇妙な生<br>き物たち》            | 和服、下駄、西洋風の傘、帽子、そして有色眼鏡とい<br>うちぐはぐな格好をする人たちが描かれている。  |
| 1881年11月<br>(p.140) | 《イトウ会社の最<br>後尾》                          | 芸を見せる舞台と客席が描かれている。客席側に有色<br>眼鏡の男性1人と、(眼球が見えない)無色眼鏡の男性3<br>人が描かれている。   |
| 1882年5月<br>(p.216)  | 《陽気でお祭り気<br>分の若者たち》                      | 和服と洋服の男性が数名描かれており、全員が眼鏡を<br>掛けているが、1人のみ有色眼鏡で、他は(眼球が見え<br>ない)無色眼鏡を掛けている。詞書に「ドイツ人のよう<br>には決してならない」とあり、初めてドイツ人の真似<br>をすることを否定している。 |

文化交流研究

|                     |                         |  |
|---------------------|-------------------------|--|
| 1882年6月<br>(p.219)  | 《出版法をすぐに破った『メール誌』の編集者》  | 新聞紙条例を破り、捕らえられたという事件があったのだろうか。その取り締まりを行なう警官の中に有色眼鏡の男性と無色眼鏡の男性が1人ずつ描かれている。  |
| 1882年9月<br>(p.257)  | 《日本の噂》                  | フランス人らしい人物が日本人を連れてどこかに行こうとしている。その日本人は有色眼鏡を掛けている。   |
| 1882年10月<br>(p.278) | 《パンチ氏と朝鮮人の遭遇》           | パンチ氏と朝鮮人たちが話し合っているような挿絵であり、背景に憲兵のような有色眼鏡の日本人が描かれている。   |
| 1883年5月<br>(p.53)   | 《レース中の反則》               | 主題とは関係ないが、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛ける日本人が描かれている。   |
| 1883年11月<br>(p.129) | 《立派でしょう？なぜ、警官は髪を切らないのか》 | ボサボサ髪の警官が描かれている。その警官は有色眼鏡を掛けている。   |
| 1884年8月<br>(p.235)  | 《文明開化論者はモンスターの様に見える》    | 文明開化論者が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。袖には「文明は永遠」と書かれている。  |
| 1884年8月<br>(p.239)  | 《ジャガナート》                | ジャガナートはヒンドゥー教のクリシュナ神の化身のこと。昔、信徒はその山車に熱狂して殺到し、それにひき殺されれば天国に行けると信じたという伝承がある。それを反映したような綱で引かれる汽車にひかれる人々の中に(眼球が見えない)無色眼鏡の男性がいる。 |
| 1884年12月<br>(p.279) | 《アルプスを越えるナポレオン》         | 背景に有色眼鏡を掛ける日本人らしき人物が描かれている。  |
| 1885年11月<br>(p.132) | 《日本へのドイツの影響》            | 和服の人々が(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。和服とは似つかわしくない眼鏡を合わせている。   |
| 1886年2月<br>(p.167)  | 《日本人の顔の形》               | 学生服のようなものを着た日本人が描かれており、(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。  |
| 1886年9月<br>(p.247)  | 《長崎の出来事》                | 中国人と日本人が対立している様子を見ている外交官が描かれている。日本人は(眼球が見えない)無色眼鏡を掛けている。   |
| 1886年10月<br>(p.262) | 《日本語の文法を習う英国公使》         | 侍と思われる人物が無色眼鏡を掛けている。   |

本表は Wirgman, Charles. *The Japan Punch*. Yokohama: anon., 1862-1887; rpt, 10vols, Tokyo: Yushodo, 1975.を参考に筆者が作成した。なお、巻と掲載年の対応は次の様になっている。第 1 巻 1862,1865,1866、第 2 巻 1867-1869、第 3 巻 1870-1872、第 4 巻 1873,1874、第 5 巻 1875,1876、第 6 巻 1877,1878、第 7 巻 1879,1880、第 8 巻 1881,1882、第 9 巻 1883,1884、第 10 巻 1885-1887。挿絵の題については『ロンドン発・横浜行き あるイギリス人画家の幕末・明治 没後 100 年記念 チャールズ・ワグマン』神奈川県立博物館、1990 年を参考にした。

### 図版一覧

全てチャールズ・ワグマンによる挿絵。( )内は挿絵が最初に掲載された出典。



図 1 《横浜の(毎日やってくる)講釈師》  
(*ILN*, August 10, 1861, p.147)



図 3 《日本の内乱：薩摩の戦場に出かける江戸の警官たち》(*ILN*, October 13, 1877, p.356)



図 2 《日本の木版画彫師》(*ILN*,  
October 15, 1864, p.404)



図 4 《パーチ先生の日本の学校、その 1》(*JP*, November, 1866)



図 5 《洋行帰りの書生、将来の日本を背負う》(JP, December, 1868)



図 8 《台湾的一幕、その3》(JP, June, 1874)

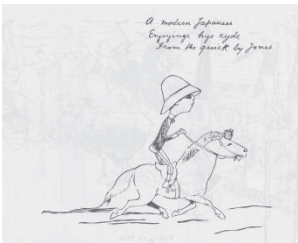


図 6 《乗馬を楽しむモダンな日本人》(JP, May, 1871)



図 9 《操り人形師》(JP, January, 1875)

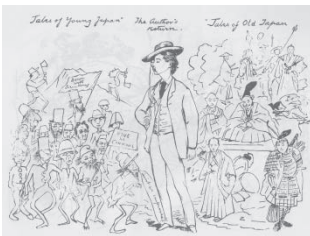


図 7 《古き日本の物語、若き日本の物語》(JP, August, 1873)



図 10 《樺太千島交換条約の様子》(JP, August, 1875)



図 11 《報道の弾圧》(JP, September, 1875)



図 14 《官軍焼き芋を食べる》(JP, March, 1877)



図 12 《奇妙な光景、毎日午後海岸通りで見かける眼鏡を掛けた馬と馬丁たち》(JP, August, 1875)

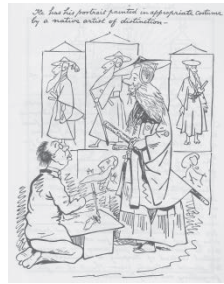


図 15 《ふさわしい衣装の人を描く》(JP, May, 1878)



図 13 《西南戦争、官軍のラッパ手》(JP, February, 1877)

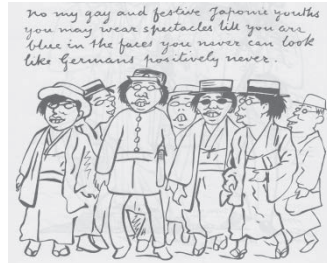


図 16 《陽気でお祭り気分の若者たち》(JP, May, 1882)



図 17 《日本へのドイツの影響》(JP, November, 1885)

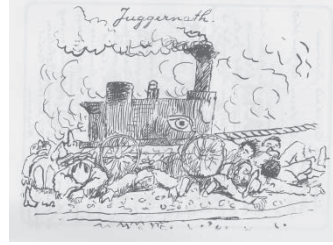


図 19 《ジャガナート》(JP, August, 1884)



図 18 《文明開化論者はモンスターの様に見える》(JP, August, 1884)



図 20 《孟子に諭される日本人》(JP, December, 1867)